Osaka University Knowledge Archive

Title	1920年代ベルリン・サークルによるシューベルト・ルネッサンス
Author(s)	山口, 真季子
Citation	大阪大学, 2013, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/60052
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

【21】

氏　　名	山　口　真季子（やまぐち まきこ）
博士の専攻分野の名称	博　士（文学）
学　位　記　番　号	第　２６０６４　号
学位授与年月日	平成25年３月25日
学位授与の要件	学位規則第４条第１項該当 文学研究科文化表現論専攻
学　位　論　文　名	1920年代ベルリン・サークルによるシューベルト・ルネッサンス
論　文　審　査　委　員	（主査） 教　授　伊東　信宏 （副査） 教　授　市川　　明　　准教授　輪島　裕介

論　文　内　容　の　要　旨

本論文は、A. シュナーベル（ピアニスト、作曲家）、E. エルトマン（ピアニスト）、E. クルシェネク（作曲家）などが形成した「ベルリン・サークル」と呼ばれた音楽家グループが、1920年代にシューベルトのピアノ作品の再評価を行ったことを取り上げ、それがどのような背景を持ち、その後のシューベルト理解にどのような影響を与えたか、ということを解明する研究である。

論文は３つの章から成る。第１章は19世紀中葉から20世紀前半にかけてのシューベルトに対するイメージの生成を扱うもので、とりわけヴィーン市立公園の記念像、シューベルトを題材とするオペレッタ『三人娘の家』(1916年)、ヴィーン市とオーストリア政府によるシューベルト記念祭、1920年代のシューベルト研究、などのポイントについて詳細に論じ、ドイツのベートーヴェンに対するオーストリアのシューベルトというイメージが確立してゆく様子を跡づけている。

第２章は「ベルリン・サークルとシューベルト」と題され、まずベルリン・サークルのメンバーとその相互の関係について論じた後、エルトマンとクルシェネクによるシューベルト解釈を、彼らの残した文章や回想などから再構成し、クルシェネクによるシューベルトのソナタの補完について分析している。

第３章はシュナーベルによるシューベルトの取組みを論じる。ここでは、まずシュナーベルの演奏活動におけるシューベルト作品のレパートリーについて整理し、その後、シュナーベル自身のシューベルトに関する著作を分析し、さらにシュナーベルの演奏録音からその解釈について論じ、またレッスン時の楽譜への書き込みについて検討した後、シュナーベルのシューベルト演奏に対する批評を検討している。

これらの周到な検討から浮かび上がってくるのは、第１章で見た１９世紀末から２０世紀前半に歴史的経緯の中で形成されて来た「オーストリア的」なシューベルトというイメージと、第２、３章で明らかになったベルリン・サークルによるシューベルト解釈が対立し、当時の批評の中で二つのシューベルト像が拮抗している、という事態である。結論では、このような対立と拮抗がもう一度整理され、「歌曲王シューベルト」という先入観から離れて、シューベルトの音楽に緻密な形式的卓越を見出そうとしたベルリン・サークルの解釈の先見性が明らかにされる。

全体はA4判198頁（400字詰め原稿用紙換算約590枚）。本文中には、必要な譜例、図版の他、シューベルトのピアノ作品の出版状況、オペレッタ『三人娘の家』に使用されているシューベルト作品の一覧、ベルリン・サークル周辺の人物相関図、シュナーベルの演奏会の曲目一覧等、独自の調査に基づく表が数多く含まれる。また巻末には、第３章第２節で取り上げられた、シュナーベルによる新聞記事「フランツ・シューベルトのピアノ・ソナタ」(1928年)が、著者自身の訳によって収録されている。

論　文　審　査　の　結　果　の　要　旨

本論文に関する口頭試問は、2013年１月17日（木）に、およそ１時間30分にわたって実施した。試問の中で、まず評価されたのは、この論文のテーマのユニークさである。これは基本的には「シューベルト・イメージの形成をめぐる批判的検討」といって良いが、そこで終わらずに非常に綿密な歴史研究となっており、シューベルト研究としてよりもむしろ２０世紀音楽研究として貴重な成果である。またそのテーマを周到に、綿密に調べ上げた、ということも特筆されるべきであろう。DAAD奨学金によるベルリン芸術アカデミーなどにおける調査や、日本学術振興会の助成によるアメリカ議会図書館シュナーベル／ルギャレク・コレクションの検討など、現時点で参照可能な、ほぼ全ての資料を踏査したと考えられ、これは国際的に見ても一つの達成であろう。また論文の叙述も堅実で、その中からシューベルトの没後に形成された彼に対するイメージが、

様々な歴史的背景の中で一つの統一的像へと収斂せず、いつまでも揺れ動くさまが浮かび上がってくる点も評価された。

ただし細部においては課題も残る。第１章の１、２節で扱われた二重帝国期と、３、４節で扱われた大戦間期の間のドイツ／オーストリア関係の変化が、あまり明確に論じられていない。また、研究の過程としては、一番最後に仕上げられた、第１章が結果として大きくなり、論文の主題である「ベルリン・サークル」の話題が、かなり遅くなって登場するあたり、多少アンバランスな点がある、という指摘もあった。

しかし本論文は、これまで顧みられることのなかった２０世紀前半のシューベルト像という興味深い問題に踏み込み、そこから芸術家像の形成過程研究として成果を引き出したばかりか、シューベルト解釈についても新しい視点を提示しており、今後のこの分野の研究にとって大きな意味を持つものとなると考えられる。以上の成果により、本論文を博士（文学）の学位にふさわしい価値を有するものと認定する。